きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第37話

水野　スウ

憲法となかよくなる1時間

毎週あいているけどはやっていない「紅茶の時間」。それをいいことに（笑）、3年前、2016年の夏から、紅茶の時間（13:00-18:00）の中の1時間（15:00-16:00）だけ使って、「草（くさ）かふぇ」ということをはじめました。

きっかけは、その年の参議院選挙。あの選挙で、憲法をかえたがっている議員の数がはじめて、衆参両院とも、国会で改憲発議のできる3分の2を超えたのです。これだけの数をてこに、いよいよ憲法が本当にかえられてしまうかもしれない、とおおいに焦った私。

その1年前、『わたしとあなたのけんぽうBOOK』という本を出し、あちこちと憲法のお話の出前には行っていたけれど、この選挙結果を受けて、私が出かけていく以外のことで、憲法ともっと近くなれる、日常的に何かできることってないだろうか、と真剣に考えました。

肩ひじ張らずに、憲法ってさ、憲法ってね、と口にしあえる、憲法をほんのちょっとでいいから自分の言葉で話せるようになる、そんな人を、なんとかふやしていきたい。そう思った時、あ！とひらめいた。それにうってつけの場所なら、すでにあるじゃない。

紅茶の時間が毎週、満員御礼でないのはむしろ幸いなこと。私がよそに行くのに加えて、これまで通り来る人を迎えるスタイルのまま、あらたに、紅茶の中で憲法となかよくなる1時間を始めます、と宣言すればいいだけのことなんだ、となんともシンプルな答えにたどりつきました。

憲法をまずは知ること、そして憲法をかえたがっている人たちがどこをどうかえようとしているかもあわせて学べば、今の憲法の存在意義だってもっと深くわかってくる。2012年に出された自民党憲法改正草案（＝草の案）はそのためのいいテキストになるだろうから、その時間のこと、「草かふぇ」っ

て呼ぶことにしよう。

たった1時間だから、よくばらずに少しずつ、その時そこに居合わせた人と、学びながら語りあう。ごく小人数でいい、その方がなお質問しやすいだろう、気軽におしゃべり感覚でいられるだろう、かたつむりの歩みでいいから、どれだけ続くものやらわからないけど、とにかく紅茶の中で毎週、草かふぇしてみよう。

社会のこと話す場

そうやって始まった草かふぇ。その時間にいあわせた何人かの人たちと、時には何も知らずにふらりと紅茶の時間にやって来た人もはいって、はじめの3ヶ月くらいはまじめに、草案と今の憲法の読みくらべ、ということをしていきました。これはこれでおもしろい発見がいっぱい。特に私には、参加している人たちの反応から学ぶこと、憲法の伝え方の新しい工夫やヒントなど、もらえるものが多々ありました。

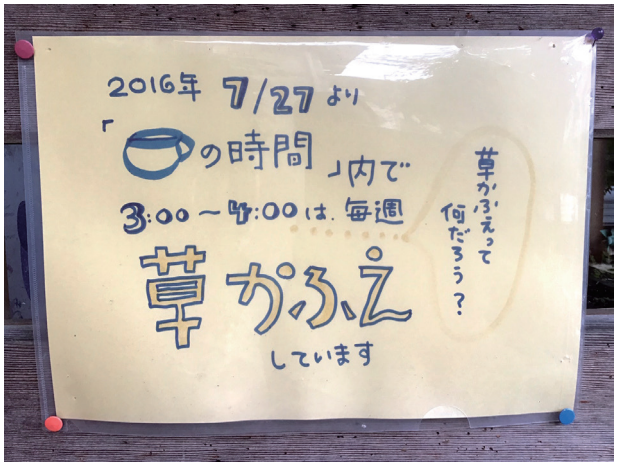
草かふぇに通う人の中にも、憲法きほんのきはしっかり根付いていったように感じます。たとえば、紅茶仲間でバスガイドを仕事にしている人は、草かふぇで学んだことを自分からも伝えたいと、自分の乗る観光バスの中で、憲法クイズやってみた、というから驚きです。

もとから自分でご当地クイズを考えるのが大好きな彼女のこと、ほんの短い時間ながら、憲法を守る義務は誰が負っているのか、憲法はなんのためにあるのかなど、基本をきちんとおさえつつ、どんなお客さんが聞いても不愉快にならない、楽しい憲法クイズを考えだしていて、それは見事でした。

「バスにはいろんなお客さんが乗るけど、クイズ通してちょっこしでも平和を考えてもらえたらって思って。でも、こんなこと考えるようになったのも草かふぇで学んだおかげだよ。これからは、令和の時代にれいわって政党ができたんですってね〜！なんてこともネタにできるわ」と笑います。

ここまでつわものでなくても、草かふぇによく来ているお母さんが、ごく何気に憲法のことを口にするようになり、家庭でも話題にし、さらには自分がボランティアで関わっている場で、憲法の話をさせてほしい、と頼んで、自分なりの憲法おはなし会を2回したの、と聞いて、これにもびっくり。

やがて、社会の出来事の根っこはみんな憲法とつながっていたんだね、と私も草かふぇ仲間も確信するようになっていくと、憲法や草案の条文に特にこだわらなくてもいいことがわかってきました。それぞれが気になる、社会で今起きていること、過去に起きたこと、よくわからないからみなで考えてみたいことなどなど、来る人たちのニーズにあわせて語りあっていけばいいと、その場がゆるやかにまわりはじめた。草かふぇの「草」が、草案の草にとどまらない、もっと広がりのある、草の根の「草」に通じる場へと育っていったのです。



定年後、お年寄りの居場所づくりに関わっている男性は、紅茶の水曜日がフリーなこともあって、草かふぇ用のノートを持参してちょくちょく参加します。知らないことを知るのはおもしろくて楽しいし、こんな話のできる場所があるっていいな、大事だなと思うから、というのが通ってくる理由だそうです。

何より、もとからの紅茶仲間たち、日頃は親の介護や孫守りに追われている人も、時間の許す日は紅茶にきて、草かふぇにも参加し、憲法だったり社会の話だったりの時間を一緒に持つことで、新聞やテレビ見る時の意識がかわったと思う、と言います。

仲間の1人は、「草かふぇに来るようになってから、私もこの社会をつくってる1人なんだな、って感覚がだんだん持てるようになった。裏返せば、それまでいかに何にも考えてない自分だったかとぞっとし

たけど、孫たちの未来思ったら、何も考えないおばあちゃんのままでいたくない。これからも勉強させてね」と。

草かふぇで、どんなことする？

「社会のこと　ふつうに話そう、暮らしのことだもの」を合言葉に、紅茶の時間のとくべつ企画のお話会やコンサート、上映会などの日を除いてほぼ毎週、草かふぇを続けてきて丸3年がたちました。

たった1時間、されど1時間、が積み重なり、気づけばいつのまに、憲法のこと、国会のこと、原発のこと、沖縄のこと、人権のこと、セクシュアリティのこと、さらにはもっとも政治的と思われる選挙に関してすら、普段のおしゃべりの延長で、紅茶に来る誰かれと語りあえるようになっていきました。

ここ1、2年の草かふぇのテーマは毎週様ざま。ある意味、なんでもありです。気になるニュース番組やEテレなどの短い録画、時には憲法関連のインターネット動画を見て、話しあう。新聞記事をもとに話しあう。同じ記事でも、こんなに取り上げ方が違うんだ、こっちの新聞だけ見てたらわからないこともあるね、ネットだけだとさらに見えなくなることがあるね、考え方が偏るかもしれない、と参加者同士で気づいていきます。

沖縄の出前から帰った後は、私が沖縄で見聞き感じたことの、お土産話報告会としての、草かふぇを。辺野古の最新情報も織り込みながら、私が沖縄で出会った人たちから聞いた言葉をその場にいる人たちと共有しました。

今年7月、紅茶にはじめてきた人が草かふぇの時間にも残って、その日にうってつけのテーマを出してくれたこともあります。参議院選挙が近づいたけど、誰がどういうところから出ていて、どんな人なのかわからない、と言うので、即、参院選をテーマに草かふぇ。

参院選では、一人が1票でなくて2票持っているんだよね。1票は自分の選挙区から出ている人の名前を書く。入れたい人がいないからって棄権や白票で入れると、それは今の与党に白紙委任状渡すことになっちゃう。もし今の与党のやり方でいいと思えなかったら、入れたい人がいなくても与党じゃない人の名前を書く方が、自分の1票が生きるよね。

もう1票は、比例区から出ている人の名前か、党の名前を書く。たとえば、山本太郎さんって人は、「れいわ新選組」という団体を4月にたちあげたばかりだけど、山本太郎、の名前は全国どこに住んでいても書けるの。それはれいわの票になって、票がたくさん集まれば、比例特定枠で立候補している重い障がいのある2人の人が当選して国会議員になれる。もっと票が集まれば、比例リスト3位の太郎さんも当選するしくみなんだって、といったことを話しました。

この日たまたま草かふぇに参加した赤ちゃん連れの人もその友人も、ネットを使わない人たちでした。選挙公報もまだ配られていないから、山本太郎もれいわもまったく初耳だったのは当たり前。加えて、1人2票持っていること、比例特定枠のしくみ、比例の場合はどこからでも候補者の名前を書けること、どれもこれもこの日の草かふぇではじめて知った、と言っていました。

知ってる人は知っているけど、ネットをしない人や、与党よりの新聞だけ読んでいる人だと、全然知らない、ってことがたくさんある。その情報格差が今はあまりに大きい。この日の草かふぇ、その格差をほんのわずか縮める場になれたかもしれません。

映画「主戦場」を観る前に

気になる映画の上映が始まる前にプレ企画をして、その後、映画を観た人たちと感想を話しあう、という草かふぇもしました。

ドキュメンタリー映画「主戦場」。私自身、この映画について知るまでは、「慰安婦」問題を巡る論争の主戦場がアメリカにある、ということも知りませんでした。監督は、日系アメリカ人のミキ・デザキさん。予告編を観て、日米韓の論客たちがスクリーン上であたかも討論しているかのような画面づくりに興味を持ったのと、何より「慰安婦」に否定的な人たちの意見をしっかり見聞きできる機会はこれまでなかったから、これは絶対に見なくちゃ、と思いました。情報量がめちゃくちゃ多い映画、ということも伝え聞いて、ならば草かふぇで予習とおさら

いをしよう、と思ったのでした。

観る前の草かふぇでは、「主戦場」というタイトルの説明をしてから、デザキさんのつくった「日本では人種差別がありますか」という6分の動画*を観ました。

*https://www.youtube.com/watch?v=MxnmMrWOj3c

この動画が公開されると、コメント欄にはネット右翼からの批判がいっぱい。デザキさんはやがて、「慰安婦」を日本ではじめて記事にした元朝日新聞記者が、自分以上の激しいバッシングをうけていることを知り、「慰安婦」問題に関心を持つようになっていきます。

2015年、上智大学大学院生になり、リサーチをはじめたデザキさんは、この問題について発言する約30人を取材。それが「主戦場」の映画になったわけですが、映画が公開されることになった時、インタビューをうけた保守系の人たちが、卒業制作というから取材を受けたのに映画にするとは聞いてない、騙された、と言い出しました。それに対してデザキさんは「彼らの発言は、彼らの自由意思。一般公開も考えている、との合意書を交わしている」とすぐに反論する動画*を公開しました。

*https://blogos.com/article/381210/。

2本の動画を見た後はフリートーク。この時点で映画を観てる人はいないので、この日の草かふぇは、差別、それも自分の内なる差別について、がごくしぜんに語り合いのテーマになりました。

アフター「主戦場」トーク

映画館での上映が終わった後は、観た人たちとの感想シェア会草かふぇ。情報量が多くて混乱した、観れてよかったけどまだ消化不良でもやもやしてる、しんどくて重い気持ち、知らないことだらけだったから余計にほかの人と話したいと思った、という人たち、7、8人が来てくれました。

それぞれにとっての印象的な場面や言葉を語ってもらう中で、少しずつ、頭の中が整理されていきます。あ、その人の言葉気になってたんだ、あれどういう意味？と質問もできる。

「慰安婦に軍の関与はなかった、強制もなかった、そんなに人数は多くない、って主張する人たちはどうしてあそこまで強く自信持って言い切れるんだろうね」「逆に、慰安婦を擁護する側の人たちは誰もが慎重に言葉を選んで語っている、と感じたよ」

「映像の力ってあるね。言葉以上に表情が物語っている、人間性まで映し出している。あ、今ごまかしたな、と観ていてわかる」「それにしても、歴史修正主義者や日本会議の人たちの、韓国に対する見下しの意識がむきだしですごかった」「歴史を正しく教える先生の1人が私だ、と胸を張る人が、反論する人の本は何も読んでいないって、どういうこと？」「こういう考えの人たちと今の政権が直結してるってことがこわいと思った」

「性奴隷、という言葉を巡る論争も知れてよかった。縄で縛られて閉じ込められて、だけが奴隷の定義じゃない。モノのように扱われて、自由意志がない中で強制される、そういう人権侵害があったのはまぎれもない事実だ」といった言葉が、その日はたくさん飛びかいました。

草かふぇは映画を評論する場じゃないから、正解も結論もない。だけど観た人たちが自由に意見を出しあって、それを聴きながら、自分一人じゃ思いつかなかった、考えるための材料をたくさんもらえた気がします。

この映画の切り口は「慰安婦」だけれど、人数の多い少ないとか、軍の強制かそうでないか、誰の言っていることが正しいのか、それに答えを出す映画というより、主題は、一人ひとりの中の差別意識、性差別、人種差別、ファシズム、戦時性暴力、人権というものに関する感覚、そういうことを観る人に強く問うている映画だと感じた。だからこの映画の矢印は自分に向けられている。というのが、この日の草かふぇを経て私の思ったことです。一人で観て終わり、だったらきっとこんなふうには思えなかったかもしれません。

「ちっちゃいこえ」の予告編

9月に金沢で講演するアメリカ生まれの詩人、アーサー・ビナードさん。アーサーさんはこれまでもずっと彼独特の言葉のナイフを用いて、原爆や原発、核の本質を伝える作品をだしてきたけれど、このた

び7年がかりではじめての紙芝居をつくりました。それが、丸木位里さんと俊さんの「原爆の図」をもとにした、「ちっちゃいこえ」という紙芝居。

この講演会を主催する「核戦争を防止する石川医師の会」で事務局を担当しているOさんとは、以前からの友だちです。彼女は、アーサーさんとの打ち合わせをかねて、紙芝居「ちっちゃいこえ」のアーサーさんによる初上演を、埼玉の原爆の図美術館まで見にいってきました。美術館もよかったし、アーサーさんの話も聞いてきて、そのことみんなに話したいきもちでいっぱい、とフェイスブックに投稿していたのを見つけて、じゃ、その話ぜひ聞かせて、講演会の宣伝もしてね、と彼女にリクエスト。講演会本番2ヶ月前の夏、Oさんに家まで来てもらって、アーサーさんプレ自主企画の拡大版草かふぇをしました。

プレ企画草かふぇでは、Oさんがお話の前に、紙芝居づくりの経緯をていねいに追った、広島のテレビ局制作のドキュメンタリー*を観せてくれました。

*「ちっちゃいこえがきこえる？～いま「原爆の図」をよむ～」RCCテレビ（2019年3月26日放送）http://play.rcc.jp/selection/190326.php?fbclid=IwAR3Rw11dfuxoENDZZcM4CQtdR0jUFcCrK493pobxmiuWOYBMhV9-a4BR8Zo

日本画家の位里さんと洋画家の俊さん夫婦が「原爆の図」を描き始めた1950年ころは、まだプレスコードがひかれていたために、原爆のことを話せない時代だった。なんとかして原爆の被害を伝えなくては、というお二人の執念。位里さんの墨絵と、油絵の具で写実を描く俊さん、画家夫婦の激しいせめぎあいが古い映像からも伝わってきます。

位里さんのお母さんの言葉「ピカはひとが落とさにゃ落ちてこん」は、紙芝居の中の「猫は爆弾を落とさない」に活かされていました。俊さんの言葉、「私たちは戦争を体験してないからわかりません、だって？　ばかか！　人間は想像することができるんだ」は、まさに今に通じる言葉です。

ビデオを観た後は、Oさんが「ちっちゃいこえ」の紙芝居を読んでくれました。人間も動物も、生きものすべてを成り立たせているのは、ちっちゃな細胞だ。放射能はその細胞たちを痛めつける。細胞たちのちっちゃいこえは君に聞こえているかい、と語り手役の黒猫が私たちに問いかけます。

16枚の紙芝居の絵は、すべて原爆の図がもとになっていると知った上で見るからなお胸に迫ってくる。70年の時をまたいで、丸木夫妻とアーサーさんと原爆を伝えたい人たちとの、壮大な協働作品。こうして紙芝居になったことで、より多くの人たちに、そしてちいさなひとたちにも、核というものの本質を手渡していくことができるようになったのです。

紙芝居の上演に続いてOさんは、5月に一人で訪ねた埼玉県東松山市にある原爆の図丸木美術館のことを、スライドショーで見せながら解説してくれました。最寄りの駅から汗をかきかき、30分歩いてたどりつくと、「遠いところをよく来てくださいました」という看板の言葉と川を渡る心地よい風が迎えてくれた。位里さんのふるさと、広島の太田川の風景に似ていることから、美術館がこの地に建てられたのだそうです。

Oさんの、原爆の図の前に立ったときの不思議な気持ち。これほど悲しい絵はないのに、美しいと感じてしまうのはなぜだろう、囁き声が聞こえてくる

ような、自分がその絵の中に入っていくような。ある絵の前では、ああ、この女性は私だったかもしれない、とOさんは思ったといいます。

あの絵を美しいと感じてしまった自分のきもちを、少し後ろめたく思っていたOさんだったけれども、その後、アーサーさんがこう話すのを聞きました。「原爆の図は、生き物の絵だ、生き物の美しさと苦しさが表現されている、この絵はみんなを巻き込む巨大な紙芝居だ」と。

プレ自主企画草かふぇの試みは、映画の予告編みたいなもの、20人近くが聞きに来てくれて有意義な時間になりました。アーサーさん、丸木夫妻のこと、はじめて知った、予習したから講演会が楽しみになった、の声。

何より、Oさん自身がとてもよろこんでいました。自分が訪ねた丸木美術館のこと、まぢかにアーサーさんの実演する「ちっちゃいこえ」を見て感じたことなど、伝えたいきもちはあってもこんな形で実現するとは思ってもいなかった。人前で話すことになったおかげで、自分の頭の中も撮影してきた画像も整理されてとてもよかった、と。話した人、参加した人、企画した私にとっても、三方よし、の草かふぇになりました。

プレ自主企画をしたことで、その後の紅茶に来た人にも、アーサーさん講演会の宣伝を具体的に話せて、講演会の切符も紅茶でよく売れています。夏の間の草かふぇでも、講演会の宣伝ついでに、アーサーさんの原爆関連の絵本、『ドームがたり』や『さがしています』など、何度か輪読する場面がありました。

場としての、草かふぇ

草かふぇでは、みんなで大事にしていることがいくつかあります。誰もえらそうにしないで、誰にでも平らに話すこと、人の意見を否定しないこと、相手の話をきちんと聴くこと。最後にかならず、短くてもふりかえりの時間をとること。草かふぇ中は、聴いているだけだった人も、このふりかえりの時だけは、時間内で一番印象的だったこと、感じたこと、思ったことを、短い言葉にして出す、というのが草かふぇのお約束です。

テレビのコメンテーターや学者の言葉の受け売りではなく、自分で考えて、言葉にしていく、その過程を大事にするのが草かふぇです。ほかの人の意見を聞いてまた考えて、自分の意見をかえていくこともあります。「さっきはああ言ったけど、〇〇さんの言うのを聞いてたら、そうか、その考えもありかな、って思った。私の見方はちょっと一方的っていうか、浅かったかもしれないって感じた」というふうに、思いと言葉が自由に行き来している草かふぇの、風通しのよさはとても大事なことと思っています。

草かふぇを続けてきて感じるのは、これが誰にとっても、自分のきもちを言葉にする練習タイムと対話の練習タイムになっているということ。わからないことがあったら何を訊いてもいい、バカにされたり、笑われたりしないと知っていれば、安心して質問もできるし、自分の考えを整理して少しずつ言葉にしていける。実際この3年間で、草かふぇ仲間は自分の言葉をどんどん獲得していっている、と感じます。自分の思っていることをちょっと勇気出して、堂々と表明する時、どの人の表情も強くて美しい。

こんな場のことを憲法にあてはめるとどうなるだ

ろう、をテーマに、ある日の草かふぇで語りあいました。

平らな関係は、一人ひとりが大切な存在、とする13条に通じている。そういう空気があって頭ごなしに否定されないとわかっているから、思ったことを言えるんだろうね。知りたいことを学びあう時間は、おおげさかもしれないけど、学問の自由の26条かな。自分の意見を言える場が確保されていること、こういう集まりをもてることが、表現の自由の21条。社会や政治のこと、こうして語りあう場を続けることって、私たちの自由や権利を手放さないための、ふだんの努力の12条。前文に書かれている、主権者としての自覚を育ててくれてる場でもあるんじゃないかな。

仲間たちから次々こんな言葉がでてくるなんて。草かふぇをはじめた3年前は思ってもいなかったことです。

私にとっての、草かふぇ

私にとっての毎週のこの時間は、いったい何だろう。どういう意味があるんだろう。思いつくまま、その意味をあげてみることにします。

たとえば、毎週草かふぇがやってくることで、ニュースを見たり、誰かの発言を知った時、これって次の草かふぇのテーマになるかも、次はこれをしてみよう、と社会に対してのアンテナを立てるのが習慣になりました。

テーマを決めていても、毎回が一期一会のワークショップのよう。集まった顔ぶれを見た上で、その日の草かふぇをどうするか、すばやく判断する訓練でもあります。

その場にいる人が、気になることがある、このことがよくわからない、と提案してくれた場合は、自分の立てたテーマに執着せずに相手の意見を優先する練習。直近では、「表現の不自由展」のことが気になっていると一人が言ったのに続いて、別の人が、韓国の人はなんで日本に対して怒っているの？と疑問を投げてくれたことから、それなら両方くっつけて今日の草かふぇのテーマにしよう、という日もありました。

そして、その場にいる一人一人を尊重する、認める練習。場を仕切らない練習。憲法にも政治にも関心のない人が来た場合、どこまでわかりやすい言葉で、その人に興味を持ってもらえるよう話せるか、いつも私が試されている。とことん平らに話す練習の場なのです。

こうして書きだしてみたことで余計にはっきりしました。やっぱり私がもっとも多く、その恩恵を受け取っています。草かふぇがあるということは、その日その時そこにいる人たちと一緒に、私がどれだけ臨機応変に、しなやかに、その1時間をデザインしていけるか、そのすばらしい練習の場をもらっている、ということでした。

環境の一部になる

3年前に始めたころは、毎週草かふぇをしています、と宣言することで、私がそれだけの危機感を持っていると示すための、旗を掲げているような意識がありました。特に最初のころは、文字通り、草案と今の憲法を読みくらべるという「草」かふぇだったこともあって、次はどの条文をとりあげようかとプランを練り、お土産用プリントも用意する、なんてことまでしていた。今振り返るとずいぶん意気込んでいたものですね。

あの頃と比べると、今はずいぶん肩のちからが抜けて、その週その週、そこにいる人たちと、何かしら社会とつながるためのいい時間を過ごせればいいかな、くらいの気持ちでいます。それは、そこに集う人たちを信頼し、リスペクトしている私がいる、ということでもあると思う。この自分も社会のひとかけらだったんだ、という意識を持つ人は、私のまわりで少しずつだけども確実にふえています。

お盆の日の紅茶。37度の予報がでていたし、どなたも見えないかも、と思ったら、草かふぇのはじまる3時前にNさん親子が。あらまあ、このお暑い中、ようこそようこそ。娘さんに紅茶でお会いするのははじめてだけど、2、3年前の憲法のおはなし会にお二人で来てくださってた。おじさんたちの多く参加してた場に、最年少の若い人がいたのでとても記憶に残っていました。

この日の草かふぇでは何をしようかきめてなかったけど、若い人の初の参加なら、きっとこれ！と、その日の午前中に届いたばかりの本を読むことにしました。坂本菜の花さんの『菜の花の沖縄日記』。

読む前に彼女のことを少し説明しました。中学を卒業した後、フリースクールに通うためたった一人で沖縄に移り住んだこと、3年の間に見聞きし、感じたことを新聞に連載していたこと、その連載が1冊の本になって、ちょうど今日届いたこと。私たち家族は、菜の花ちゃんが生まれるずっと前に、珠洲でお宿をしているお父さんと出逢ったこと、今は彼女もお宿を手伝っていて、1月には紅茶の時間のゲストとしてお話に来てくれたこと、などなど。

そして、本の目次から自分のすきなタイトルをひらめきでえらんで、そのページを読む、ということを、Nさん親子と私たち夫婦の4人でしました。それぞれが選んだのは、「戦争は、人を守らない」「どうすれば自分ごとにできる？」「アンテナを張って自分の場所で生きよう」。私が選んだのは「あなたもわたしも無力じゃない」。これは長い文章なので、4人で輪読しました。4人の輪読タイムに、突然雨がふりだして結構な雨音、雷も何度か轟き、それでもセミは鳴き、かたわらの扇風機の風の音もする、その中で、菜の花ちゃんの言葉を読む、一人ひとりの違う声。一つ読むごとにそれぞれ、感じたことをいって、最後に全体のふりかえりをして、ちょうど1時間。そのころにはもう雨も上がり、という不思議な時間でした。

3年前の参院選の結果からはじまった草かふぇ。今年の参院選では、改憲勢力の議席数は3分の2に達しませんでした。だからといって手放しでよろこぶ気になれません。だからこその、ふだんの努力の草かふぇ。

それと同じ意味合いで、48.8%という投票率に絶望することもしないでおこうと思います。家庭でも学校でも職場でも友だちの間でも、政治の話や選挙の話をしない、という環境でずっと生きているなら、その数字も当たり前だと思うからです。

デンマーク語の「デモクラチ」は、「民主主義」を意味する言葉であると同時に、「人と人の間のオープンな会話」という意味も持っている、とごく最近知りました。だとするなら、草かふぇはデモクラチの場所、民主主義を、対話を、練習する場所、と言いたいです。投票率の低さが、政治の話をまったくしないという“環境問題”であるのなら、草かふぇは、政治や社会をふつうに語りあう環境の、その一部になろうと思います。

2019.8.24